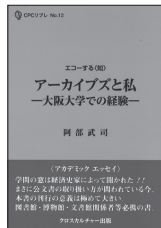


阿部武司著

『アーカイブズと私

—大阪大学での経験』



紹介者：清水 善仁

本書は、経済史・経営史研究者である著者が、大阪大学在職時のおもに2000年代に執筆したエッセイを一書にまとめたものである。タイトルに「アーカイブズ」とあるのは、著者が大阪大学においてアーカイブズの創設を主導する立場にあったこと、あるいは企業のアーカイブズとのかかわりが増えたことに起因するが、本書の内容はアーカイブズ論に限定されたものではなく、経済史・経営史研究の国際化や読書に関する私見を述べている箇所もあり、著者のこれまでの経験とそこから得られた幅広い見識が示されている。

本書の構成については以下の通りである（括弧内は各章あるいは各章に含まれる個別エッセイの初出年）。

- 第一章 図書館・博物館・文書館（2012）
- 第二章 企業アーカイブズと大学（2019）
- 第三章 大学アーカイブズと企業アーカイブズ—現状と課題—（2016）
- 第四章 アーカイブズ創設とアーキビスト（2019）
- 第五章 大阪大学アーカイブズの構築（2007・09・10・13・14・16）
- 第六章 日本の官公庁における文書保存（2010・13）

- 第七章 外国のアーカイブズ（2011・15）
- 第八章 大阪大学経済史・経営史資料室（2003）
- 第九章 社会科学研究的国際化（2000・05・08）
- 第十章 読書の効用（2010・11）

第一章から第八章までがアーカイブズを中心とした歴史情報資源の保存や活用にかかるエッセイであり、とりわけ第五章にもっとも多くのページが割かれている。それはとりもなおさず、大阪大学アーカイブズの構築に著者が大きな役割を果たしたことの証左でもある。2005年に「文書館（仮称）設置検討ワーキング」が組織されて以来、大阪大学におけるアーカイブズ創設の議論にかかわり、2006年発足の大阪大学文書館設置準備室、2012年発足の大阪大学アーカイブズではいずれも室長の重責を担っている。著者は「文書館（仮称）設置検討ワーキング」の発足当手を振り返り、「私はアーカイブズに関して、ユーザーとしてはいろいろとお世話になっていましたけれども、アーカイブズとは何かとか、どうやってそれを設立・運営するのかといったことに関しては全く知識を持っておりませんでした」（53頁）と述べているが、アーカイブズのユーザー（利用者）から室長というアーカイブズの管理者へとその立場を変えたことで、全国大学史資料協議会への参加や他大学の大学アーカイブズ調査等で得た知識や経験をもとに、アーカイブズの創設とその後の活動を推進していったのである。その折々に執筆されたのが本書掲載の各エッセイであり、ここからは著者のアーカイブズに対する認識を随所に読み取ることができる。小稿では、そのなかから紹介者が特に注目した四つの論点を取り上げ、それに対する紹介者の感想を述べることで本書の紹介にかえたい。

第一に、アーカイブズの存在意義について。著者は大阪大学文書館設置準備室時代、次のような批判を学内から受けたことを紹介している。「このペーパーレス化・デジタル化の時代に場所ばかりとる古い資料などを取っておいても何の役にも立たない。図書館や博物館がすでにあるのに、今さらお金のかかる、似たような施設を何で創る必要があるのか」(58頁)。著者はこのような批判には冷静に対応し、同準備室発行のニューズレター等を通してそうした批判に答えていったと述懐しているが、この種の批判は大阪大学に限らず、大学、いや行政や企業等、あらゆる組織のアーカイブズに対してもなされることがしばしばある。アーカイブズという存在とそれへの理解がまだ社会に根付いていないがゆえの批判であると思うが、「古い資料」が組織の挙証説明責任や政策立案に有効であること、あるいはアーカイブズが図書館や博物館とは異なる固有の機能があるということ等がこの種の批判への回答となるだろう。著者は近現代日本における歴史的資料の焼却や廃棄の事例に引き付けて、こうしたことが進むと「過去の歴史に対する客観的な評価が不可能になりますし、私たちが日々苦労して積み上げてきた貴重な知恵も忘れ去られてしまい、将来に禍根を残すことは明白です」(72頁)と指摘するが、こうしたアーカイブズの存在意義を広く社会に伝える努力が、アーカイブズ関係者には今なお求められていることをあらためて痛感させられる。

第二に、アーカイブズの役割について。著者は「良きアーキビストとは？」という問いに対して回答するなかで次のようなことを述べている。「資料や情報の提供こそがアーキビストの仕事だと思うのですが、それに関連するからと言う理由で、大学史や社史の執筆をアーキビストに丸投げすることが実際にはしばしば行

われております。[中略—紹介者註、以下同]アーカイブズは社史や大学の編纂委員に資料を提供する所であって、それらの執筆を依頼すべき所ではないことを管理者の方には是非認識してほしいと思います」(67頁)。これは重要な指摘であり、アーカイブズが記録史料の提供(公開)を主とする機関であるとの理解は紹介者も共感するものである。もとより著者は、国立大学のアーカイブズの実態として、現実にはアーキビスト(アーカイブズの専任教員)が校史編纂に加わらざるをえないことも多いことを認識しているが、それでもそうした実態は「決して奨励されるべきことではない」との見解を示しており、「国立大学のアーカイブズに固有なミッションは、大学に関する選び抜かれた文書を集めることなのであり、校史編纂などそれを使う仕事と混同してはならないのである」(33頁)と繰り返し強調している。実態として致し方のない側面はあるものの、著者のようにアーカイブズの役割を理想的に位置づける志向は決して軽視されてはならない。

第三に、アーカイブズと自校史について。大阪大学アーカイブズでは、準備室時代より「大阪大学の歴史」という全学共通教育科目を主催し、その取りまとめ役を担っている。いわゆる自校史教育にアーカイブズあるいはその関係者が関与することは多くの大学でおこなわれているが、そのことに関連して、著者は大阪大学に在籍する教職員や学生がみずからが所属する大学の歴史を学ぶことの意義を次のように述べている。「戦後の新制大阪大学の設立前後に、すぐれた研究・教育がいかになされてきたのかをきちんと認識してはじめて、自分の学校・職場に対する誇りが得られよう。さらに教職員は、過去に先輩たちが、大学運営にかかわる様々な困難をいかにして克服してきたのかをみることによって、阪大の将来に対する具体的な指針を

得られよう」(75頁)。ここで述べられる「誇り」は「アイデンティティ」という言葉にも置き換えられよう。自校史教育を学生のアイデンティティ確立の観点から位置づける議論は大学アーカイブズの分野でもすでになされており、この指摘もその組上に載るものといえよう。他方で教職員にとっての自校史の意義については、さほど議論が深められているとはいえない。その意味で、著者の指摘は大学アーカイブズ論における新たな課題の提起とも受け止めることができる。

第四に、企業資料の保存と大学との関係について。大阪大学には大同生命や三和銀行等、企業等からの資料の受け入れがなされており、それらを保存する経済史・経営史資料室という施設が備えられている。こうした企業等からの資料寄贈について、著者は次のように述べる。「このような資料〔企業等の一次資料〕にはすでに一九七〇年代ごろから寄贈されたものも少なくないであろうが、それにしてもバブル崩壊後の長期不況下では、アーカイブズを組織内に持つことが困難になってきた企業や業界団体が、すでにみた英国のランカシャーの場合と同様に、大規模な大学の図書館等に資料の寄贈を依頼してくる時代が到来したように思われる。それは、企業、大学の双方にとって望ましいことなのかも知れない」(22頁)。企業等からの資料寄贈の動向は、神戸大学や九州大学等、大阪大学に限ったことではないとのことだが、こうした貴重な資料の受け皿として大学があることの意義はもっと強調されてよい。企業等の資

料に限ったことではないが、本来、組織で生み出された資料は当該組織が保存・公開するのが基本だが、予算や人員体制等、様々な問題からそれが不可能となり、場合によっては廃棄される事例も少なくない。そのようななか、大学がそうした資料を受け入れて整理・公開することは、研究・教育への活用はもとより、歴史情報資源の将来への継承という側面からも非常に重要である。本誌の発行主体である法政大学大原社会問題研究所もまた長年その役割を果たしてきた組織であるが、今後はそうした大学の役割が社会からさらに求められる時代になるように思われる。

この他にも、図書館・博物館・文書館（アーカイブズ）の関係の在り方や、官公庁における文書保存の問題等、論点は多岐にわたるが、紹介者の興味関心から以上の四点にしぼって紹介した。先に示したように、本書には初出が10年以上前のエッセイも含まれているが、現在に引き継がれるテーマへの指摘も多く、今日のアーカイブズをめぐる諸課題を考えるうえで様々な示唆を与えてくれる。アーカイブズや大学の関係者はもとより、公文書管理や記録史料の保存・活用等に関心のある多くの方に手に取っていただきたい一書である。

(阿部武司著『アーカイブズと私——大阪大学での経験』エコーする〈知〉CPCリブレNo.12、クロスカルチャー出版、2020年2月、184頁、定価2,000円+税)

(しみず・よしひと 中央大学文学部准教授)